

10. 統計でみる畜産のすがた

10-1. 世界と日本の畜産の現状

世界の家畜頭羽数

牛	13億5,000万頭
豚	9億6,000万頭
羊	10億頭
山羊	8億頭
鶏	167億羽
馬	5,500頭

生産される畜産物

牛肉	5,600万トン
豚肉	9,100万トン
家きん肉	7,000万トン
生乳	5,800万トン
鶏卵	5,600万トン

<FAOSTAT, 2005年>

日本では牛455万頭、豚960万頭、鶏2億9000万羽

乳用牛	172万頭
肉用牛	283万頭
豚	960万頭
鶏	1億8,500万羽
ブロイラー	1億500万羽

生産される畜産物

牛肉	47万トン
豚肉	123万トン
鶏肉	119万トン
鶏卵	251万トン
牛乳及び乳製品	831万トン

世界、日本ともに人口よりも家畜が多い。

10-2. 日本の畜産

10-2-1. 生産

(1) 酪農

戦後、高度経済成長と学校給食に代表される洋風化により、牛乳・乳製品の消費は急速に拡大してきた。これにより昭和40年、1戸当たりわずか3.4頭の乳牛飼養頭数だったのが、平成15年には平均57.7頭となり、欧州の平均規模を上回っています。さらに、1頭当たりの年間搾乳量も7,500kgを越え、米国に並ぶ世界トップクラスの生産性を誇っている。しかし、こうした飛躍的な規模拡大と生産性向上が進む一方で、酪農家の数は激減しており、昭和38年のピーク時に417,600戸あった酪農家は、平成16年には28,800戸と約15分の1にまで減少している。

<表：わが国の家畜の頭羽数の推移(1877-2003年)>

<グラフ：酪農牛の飼養頭数、戸数、一戸あたり頭数の変化(1989-2004年)>

(2) 肉牛

肉牛は役畜として耕作に重宝され、大戦による一時的な減少を除いて急速に伸びた。1960年代前半に耕うん機が普及、役肉用牛から肉を生産するためだけの肉牛へとその目的が大きく転換した。1968年以降は消費の拡大をうけて生産は増大。しかし、1995年以降、牛肉の輸入自由化と狂牛病の

発生により停滞を余儀なくされている。

< 表 : わが国の家畜の頭羽数の推移 (1877-2003 年) >

< グラフ : 肉牛の飼養頭数, 戸数, 一戸あたり頭数の変化 (1870 (頃) -2000 年) >

(3) 養豚一大規模, 多頭飼育化

日本では1960年(昭和35年)には, 日本の約80万戸の農家(養豚農家)で190万頭の豚が飼育されており, 農家1戸あたりの飼養頭数は2.4頭であった。それ以降, 豚の数は増減をくりかえしながらも食肉需要の増大に対応しながら増加する一方, 農家数は次第に減少してきた。

1979年(昭和54年)からは, 国内の消費量を大幅に上回る生産量の増加によって, 長期間にわたって豚肉の価格が低迷し, 農家数の減少にさらに加速がかかった。2003年(平成15年)には9430戸の農家で973万頭の豚が飼育されており, 農家1戸あたりの飼養頭数は1031頭に増大しました。

年度	戸数	頭数(千頭)	一戸あたり飼育頭数 (飼養密度)
昭和40年	701,600	3,976	5.7
45	444,500	6,335	14.7
50	223,400	7,689	34.4
55	141,300	9,998	70.8
60	83,100	10,718	129.0
平成2	43,400	11,817	272.3
7	18,800	10,250	545.2
12	11,700	9,806	838.1
15	9,430	9,725	1031.3

出典: 『畜産統計 平成14年度版』(農林水産省統計情報部、平成16年2月発行)

< 参考: 表 わが国の家畜の頭羽数の推移 (1877-2003 年) >

(4) 養鶏

1900年代初頭から60年頃までは, 戦争の一時期を除いて養鶏の普及とともに飼養羽数, 飼養戸数ともに伸びた。ケージ飼育の導入により, 60年代以降は採卵鶏とブロイラーは区別されるようになる。卵・肉用種ともに, 60年代後半以降から飼養戸数が激減している反面, 飼養羽数は伸びており, 企業形態への移行が見られる。近年は消費の停滞により伸び悩んでいる。

< 表 : わが国の家畜の頭羽数の推移 (1877-2003 年) >

< グラフ : 養鶏の飼養羽数, 戸数, 一戸あたり羽数の変化 (1905 (頃) -2000 年) >

10-2-2. 消費

一人あたり消費量は, 食生活の欧風化に伴って畜産物からの蛋白質摂取量が増加したことにより, 1960年以降急速に増加した。鶏卵の伸びは1970年, その他の品目も近年では伸びが鈍化し, 消費が飽和に達していることがわかる。次に国内消費仕向け量を見ると, 技術革新と飼料の輸入, 産地形成

に伴い1960年からの40年間で乳製品は約7倍、肉類は12倍に増加した。

< 表 : 国民1人1年当たりの畜産物消費量の推移(1907-2010年) >

< グラフ : 一人あたり消費量 : 牛乳・乳製品, 肉類, 鶏卵(1960(頃)-2000年) >

< グラフ : 国内消費仕向け量 : 牛乳・乳製品, 肉類, 鶏卵(1895(頃)-2000年) >

10-2-3. 輸入

(1) 食肉の輸入

食肉の輸入量は、1930年代以降、全体的に順調に伸びている。輸入食肉(牛肉・豚肉・鶏肉)が国内消費に占める割合は、45%程度である。この背景には、国内における消費の拡大に加え、1991年の牛肉輸入自由化など、輸入に対する規制の撤廃があげられる。

< グラフ : 食肉の輸入量 : 牛肉, 豚肉, 鶏肉, その他の肉, 鯨肉(1920(頃)-2000年) >

(2) 飼料の輸入

わが国の飼料輸入の歴史は明治20年代にさかのぼる。当時旧満州からの大豆かす等の輸入を促進した保税工場制度は、戦後も認証工場制度に引き継がれ、「加工畜産」と称される、輸入飼料に依存した日本の畜産を支えた。しかし、近年では土地とかい離した飼養による畜産環境問題の発生、安全な畜産物への消費者の関心の高まりを受け、飼料の自給が叫ばれ始めている。

< 表 : 濃厚飼料の輸入・生産割合(1927-2003年) >

< グラフ : 飼料の輸入量(1965(頃)-2000年) >

参考資料：食料需給表（平成 17[2005]年 8 月 19 日 農林水産省発表）

平成 16 年(2004 年)の動向

(1)食料自給率（食料消費について国産でどの程度賄われているかを示す指標）

- ・カロリーベースで 40%（7 年連続横ばい）
- ・生産額ベースで 70%（対前年度横ばい）

(2)消費

・ B S E や鳥インフルエンザ発生の影響等により牛肉及び鶏肉，不漁により漁獲高が減少した魚介類の消費が大きく減少

- ・米や野菜についても従来からの消費の減少傾向が継続国民 1 人当たりの年間消費量（kg）

	H15	H16
米	: 61.9kg	→ 61.5kg
牛肉	: 6.2	→ 5.6
鶏肉	: 10.1	→ 9.8
魚介類	: 35.7	→ 34.5
野菜	: 95.2	→ 92.9

(3) 生産

- ・観測史上最多の台風上陸等の気象災害等により，多くの品目で減少

国内年間生産量

	H15	H16	
国内生産量（万トン）	大豆 : 23 万 t	→ 16 万 t	消費量の約 5%弱
	魚介類 : 549	→ 514	約 50%
	果実 : 367	→ 346	約 45%

(4) P F C (タンパク質・脂質・炭水化物)バランス

- ・肉類，魚介類，油脂類等の消費減により，脂質の割合が若干減少

	H16 年度熱量比率	H27 年度目標
Protein(タンパク質)	13.1%	13%
Fat(脂質)	28.7	27
Carbohydrate(炭水化物)	58.2	60

詳細は農林水産省ホームページ <http://www.kanbou.maff.go.jp/www/fbs/fbs-top.htm> を参照